

栽培漁業技術開発事業調査（タイワンガザミ） （要約）

佐多忠夫

1. 目的及び内容

タイワンガザミ資源の積極的な増加を図るために、人工種苗の放流調査と天然における資源生態調査を与那海域で昭和59年度から継続的に実施し、栽培漁業の技術開発と事業化を図ることを目的とする。

本調査結果は「平成3年度栽培漁業技術開発調査事業報告書（沖水試資料No.113）」にて報告したので、ここでは要約を示した。

2. 要約

1. 今年度は与那城村地先の海中道路北側の干潟水域にて、第1回次85千尾（平均甲幅8.2mm）、第2回次159千尾（8.7）、計244千尾の稚ガニの直接放流を行った。放流稚ガニは放流後4-7日で放流区域内の密度が1尾/㎡近くまで減少し、逸散がかなり早いことがわかった。

2. 天然稚ガニの定着は4-6月に大きなモード1.066尾/㎡、10-11月頃に小さなモード0.2尾/㎡がみられた。前期に大きなモードがみられたのは1986年以後のことである。

3. 与那城村、石川市、勝連、沖縄市、中城漁協の漁獲量調査を行った結果、1991年の漁獲量はそれぞれ13.5トン、8.6、2.4、7.7、7.6であり、最も与那城村漁協が多かった。勝連漁協以外の漁協は、前年よりも今年は漁獲量が増大した。

4. タイワンガザミの平均単価は石川市漁協が935円と最も高く、ついで沖縄市725円、中城713円、与那城村639円、勝連495円であった。

5. 沖縄県において、カニ類の漁獲量は1972-1990年で19-134トンであり、数年周期で変動する。カニ類の漁獲量の中でガザミ類が72-82%を占め、カニ類の漁獲変動がガザミ類の漁獲変動と考えると良い。

6. 与那城村漁協において1989-91年のカニ類漁獲量は、6.4-14.1トンであり、そのうちタイワンガザミが4.9-13.5トン（77-96%）を占めているため、タイワンガザミの漁獲変動はカニ類の漁獲変動と考えることができる。与那城村漁協においてタイワンガザミの漁獲量は、4-5年周期で豊不漁がみられる。

7. 与那城村漁協に水揚げされるタイワンガザミは、雌雄とも夏場に小型個体が、冬場に大型個体が多く漁獲される。

8. 与那城村漁協のタイワンガザミの漁獲量と天然稚ガニ定着数及び稚ガニ総数（天然稚ガニ定着数+放流数）の間には、弱い正の相関があるが、統計的には有意ではない。しかし、三者の間には何らかの関係があると思われるので、今後とも資料の蓄積が必要である。

9. 放流効果については、与那城村漁協においてタイワンガザミの漁獲量は前年より増加しているが、放流を実施していない漁協においても漁獲量の増加がみられるため、放流効果があると明確にはいうことはできない。